2 外国語習得における年齢別特徴と教授法

幼児期から英語を始めると、海面が水を吸い込むように自然に英語を吸収していきます。しかし3歳児と小学校6年生では、興味や知的好奇心、体力、運動などの発達段階に大きな違いがあり、「児童英語教育」と、教え方をひとまとめにしてしまうことは危険です。

中学入学時（13歳）から22歳までの10年間と、2歳から小学校卒業時（12歳）までの10年間を比較すると、同じ10年間でもその発達段階には大きな違いがあります。もちろん発達の速度は個人によって異なりますが、それぞれの年齢の特徴を把握し、発達段階に応じた言語材料や教授法を使って教える必要があります。たとえば5歳までは、聞き取りがとても優れていて、聞いた音をそのまま発音することが可能ですが、10歳をすぎると、母国語にない音はなかなか発音できなくなります。幼児期の子供は母国語に訳すことなく、その言葉が話された場面によって意味を把握することができます。一方、語彙のつづりに関しては、10歳を過ぎてからの方がスムーズに覚えられます。この年齢からは文字を導入した方が上達が速くなる場合があります。10歳までは音声教育に比重を置くことが大切です。幼い頃から熱心に語彙のつづりや言語規則を教えるのは時間の無駄であると言えるでしょう。同様に、英語の歌が英語教育に効果的であるからと言って、小学校6年生になっても歌とお遊戯ばかりしていても効果は望めません。

個人差はありますが、常に子供をよく観察しながら、その子供に一番適切な言語材料を、適切な時期に、適切な指導法で教えていくことが大切です。クラス編成の際は、英語の習得レベルとは別に、子供達の年齢による学習上の特徴を考慮に入れたいものです。

ここでは対象年齢を幼児・小学校低学年、小学校中学年、小学校高学年～中学生の3つに分類し、EIL（English as an International Language）における特徴を記しました。

幼児・小学校低学年（3ー6歳児）の学習上の特徴

1. 聞いた音をそのまま再生（発音）することができる。
2. 英語の語彙や文章を吸収する力が非常に優れている。
3. 日本語に訳すことなく、場面で英語を理解することができる。
4. 英語特有のリズム、イントネーションを自然に身に付けることができる。
5. 機械的に英語を暗記する。
6. 語句や文章をひとかたまりとして捉える。
7. 楽しければ、同じ言葉を何度でも繰り返す。
8. 集中力は短い。

9 身体を大きく動かす活動を好む。
10 えんぴつを使い、文字を正しく書くのは困難である。（3ー5歳児）

幼児は楽しい歌やチャンツが大好きです。日本語の意味がきっちりとわかっていなくても、リズム、イントネーションを的確に捉え、すばらしい発音でどんどん覚えていきます。特に、動作や指遊び（finger play）を伴うことによって何度でも飽きずに繰り返します。文章を機能的に使うことから言えば天才と言えましょう。幼児が教室内で最初に使う表現として“May I go to the bathroom?”があります。彼らにとって、May が助動詞であるとか、意味が何であるかは関係なくトイレに行きたい時の言葉として丸ごと覚えるのです。

このような幼児の特徴を踏まえると、授業は英語のみでおこなうのが最善でしょう。レッスンは指遊びやお遊戯や走ったりするような大きな動作を含む活動が喜ばれます。しかし集中力はあまり長くないため、次々と楽しい活動を組んでいくとよいでしょう。歌やチャンツはただ聞かせるのではなく、動作を伴って教えましょう。指導者はジェスチャーや、顔の表情をオーバーに変えたりしながら、語句や文章の意味を示しましょう。教室内の行動は、指導者が命令形で指図しながら、指導者自身も常に行動して（TPR）子供達に理解させます。

ピクチャーカードも有益ですが、実物を見せながらおこなうことも大切です。同じ言葉や語句が繰り返し出てくる絵本を、指導者が感情豊かに話して聞かせることも効果的です。そして指導者自身が活発で、明るく振舞うことが大切です。語彙のつづりを覚えたり書くことはこの年齢では教えない方がよいでしょう。

小学校中学年（7ー9歳児）の学習上の特徴

1 聞いた音をそのまま発音するのが難しくなる。
2 英語の語彙や文章を吸収する力が優れている。
3 英語のリズム、発音、イントネーションを無理なく身に付ける。
4 語句や文章をひとかたまりで覚える。
5 恥ずかしさを感じずに英語を言うことができる。
6 英語を場面や動作によって理解するが、少し日本語を付け加えると理解が早くなる。
7 外国や外国人講師に興味が湧くようになる。
8 機械的に英語を暗記する。
9 動作を伴う活動を楽しむ。
10 アルファベットの大文字、小文字を認識し、ノートに書き写すことができる。

このような学習上の特徴を持っている小学校低・中学年の子供達を教える時は英語のみで授業をおこなう方が効果的ですが、子供によっては、どうしても理解できない言葉を一度だけ日本語で示すとずいぶん理解が早められるようです。動作を伴う歌やチャンツ、マザーグースも有効です。たくさん暗誦できるようにさせましょう。子供達に親しみのある物語の絵本（「三匹の子豚」など）を感情をしっかりつけて読むと、少々文章が難しくても、わからない語彙が出てきても理解できます。同じ文型の繰り返しが多い絵本も有効です。外国語に対して興味が出てくる時期なので、日本語との相違点、たとえばアルファベットの持つ音や、外来語の正しい発音を教えましょう。ただ、英文を日本語に訳さずに理解できる貴重な年齢なので、文章の規則やフォニックスのルールを重点的に教えるのはあまり賛成できません。学習時間は限られていますので、子供達の発達段階に合った、好奇心を刺激するようなインフォメーション・ギャップを持つ活動や、自分の意見を言えるような活動に時間を使いましょう。挨拶や簡単な日常の決められた語句をクラス内でどんどん使えるようにしましょう。決められた（コントロールされた）語句を使って、子供達の実生活を題材にしたインタビューゲームをおこなうことも効果的です。

小学校高学年～中学生（10歳以上）の学習上の特徴

1. 外国語や外国について「教科」として学習している自覚がある。
2. 子音の後に母音が付く傾向がある。
3. 日本語にない音を日本語の一番近い音で代用する。
4. 英文を暗誦したり、理解するのに母国語での明瞭な理解が必要となる。
5. 自分の理解度を母国語で確認する傾向がある。
6. 外国人の先生とのコミュニケーションに興味がある。
7. 読むこと、書くことに興味が出る。
8. 読んだり、書いたりすることで、理解を助ける。
9. 文章の規則を見つけようとする。
10. 文章の規則の説明が理解を助ける。
11. 創造的な活動に興味を示す。
12. 自分の意見を表現できる。
13. 子供によっては、歌を歌ったり動作（遊戯）をすることを恥ずかしがる。

小学校高学年になると、歌を歌ったり踊ったりすることが恥ずかしくなります。英語の語彙や文章の能力が限られているため、とかく活動が幼稚になりがちですが、限られた

語彙や文章であっても、その年齢の子供達の知的好奇心を満足させる活動が必要です。この年齢では、理屈で英語を理解しようとする傾向が強くなるので、文型を教えるためのチャンツや、語彙を効果的に教えるための歌を取り入れましょう。幼児期は複雑な長い歌でも簡単に覚えてしまいますが、この年齢になると、意味を明確に理解できないとなかなか歌えないので、短いけれど効果的に語彙や文型を覚えられる歌やチャンツを選ぶとよいでしょう。

声変わりなどによって、歌うこと自体が苦痛になる場合は、チャンツにして覚えると効果的です。文法は決して文法用語を使って説明するのではなく、たくさんの例からその規則を見出す帰納的な手法を使って理解させましょう。指導者から教えられる語彙や文章を暗記するのではなく、子供達が自分の意見を口語で発表したり書いたりできるように、指導者は子供達から英語を引き出す役割（facilitator）に徹してください。そのため、授業の中で英和・和英辞書を使い始めさせることもよい手段です。

この年齢になれば国際（理解）教育の内容を持つダイアログ、チャンツ、歌、文章も取り入れましょう。また、フォニックスのルールを教えることで、子供は自分で読める喜びを感じるようになります。そして「情報を得るための reading」、「意見を言うための課題」、「調べて発表する課題」など、課題解決活動を取り入れてください。常に英語が子供達の自己表現のための言語であることを、十分考慮に入れて教えていくことが大切です。そのためにも、指導者は子供達が達成感を味わえるさまざまな活動を用意してください。

以上のように、子供達は年齢によって、能力も興味もずいぶん違ってきます。ただし、児童英語教育のわが国の現状を見ますと、幼稚園から英語を始める子供、小学校に入ってから始める子供、小学校高学年になってから始める子供というように、英語開始年齢もその授業の頻度も千差万別です。初めて英語に接する小学校高学年の子供が、国際語としての英語習得において英語を10年近く勉強している子供と同じ特徴を持つとは限りません。担当クラスの子供達の英語学習経験、クラスの種類などを総合的に考え、ここに記した年齢別特徴とそれに合った教授法を参考に、一番適した教授法を選んでください。